3E04

自然結合軌道(NBO)に基づくエネルギー密度解析(EDA)の開発 (早大理工) 馬場 健,今村 穣,中井 浩巳

【緒言】近年の電子状態理論の発展と計算機性能の向上により,ナノ・バイオといった大規模分子に対しても量子化学計算が可能になりつつある。しかし大規模計算になるに従い計算結果から必要な情報を見出すことが困難となり,解析手法の充実はますます重要となる。代表的な解析手法としては電子密度解析があり Mullikenの方法(MPA)やLöwdinの方法(LPA) Bader による AIM, Weinhold らによる NPA など様々な手法が提案されている。また Weinhold らは NPA の基底である自然原子軌道(NAO)を基礎にした自然結合軌道(NBO)解析^[1]を提案している。これは電子の占有数に基づいて分子環境下の局在化結合軌道を自然な描像になるよう決定しており,化学的な直感にも近く,近年よく用いられている。

一方,我々のグループではエネルギー密度解析(EDA)^[2]を提案してきた。これは量子化学計算で 得られた系の全エネルギーを構成原子に分割する解析手法であり,局所的なエネルギーの変化や 反応前後での活性な部位の評価に有用である。これまでにAO基底の代わりにNAOを基底とした EDA (NAO-EDA)を提案しており^[3],従来法に比べ基底関数依存性が小さいという特徴がある。 本研究では,EDAをNBO基底に拡張する(NBO-EDA)ことにより,従来化学的な解析が困難であ った相関エネルギーの詳細な検討を目指した。

【理論】CCSD 法は現在普及している電子相関法のうち最も高精度な手法の1つとして受け入れられている。閉殻系に対する CCSD 相関エネルギーは,以下のように表せる。

$$\Delta E^{\text{CCSD}} = \sum_{ijab} c^{ab}_{ij} \left[2(ia \mid jb) - (ib \mid ja) \right] \tag{1}$$

ここで,*i*,*j*,...は占有 MO, *a*,*b*,...は非占有 MO, *c*^{*ab*}_{*ij*} は 1 電子及び 2 電子励起の振幅で表される有 効 2 電子励起係数である。

$$c_{ij}^{ab} = t_{ij}^{ab} + t_i^a t_j^b \tag{2}$$

この CCSD 相関エネルギーを NBO 基底の EDA により解析するために,次の二通りの観点から検討する。

(i) NBO $\phi_{\mu} \rightarrow \phi_{\nu}$ 励起の寄与:

$$\Delta E_{\mu \to \nu}^{\text{CCSD}} = \sum_{ijab} C_{\mu i} C_{\nu a} c_{ij}^{ab} 2 \left(\mu \nu | jb \right) - \sum_{ijab} C_{\mu i} C_{\nu b} c_{ij}^{ab} \left(\mu \nu | ja \right)$$
(3)

(ii) NBO ϕ_{μ}, ϕ_{ν} 間の電子衝突の寄与:

$$\Delta E_{\mu \cdots \nu}^{\text{CCSD}} = \sum_{ijab} C_{\mu i} C_{\nu j} c_{ij}^{ab} 2 \left(\mu a | \nu b \right) - \sum_{ijab} C_{\mu i} C_{\nu j} c_{ij}^{ab} \left(\mu b | \nu a \right)$$
(4)

(i),(ii)により分割された相関エネルギーは,次の保存則を満たす。

$$\Delta E^{\text{CCSD}} = \sum_{\mu\nu} \Delta E^{\text{CCSD}}_{\mu \to \nu} = \sum_{\mu\nu} \Delta E^{\text{CCSD}}_{\mu \cdots \nu}$$
(5)

【結果と考察】本研究では cc-pVDZ 基底による N2 および CO 分子の CCSD 相関エネルギーを

NBO-EDA により解析した。Table 1 に分 割手法(i)による結果を示す。行は励起元 の NBO,列は励起先の NBO を表してい る。ただし、励起先の Rydberg 軌道(RD*) は原子ごとにその寄与をまとめ,また括 弧中にはそれぞれの軌道の性質も示し てある。電子励起寄与のうち同じπ π* が最も相関エネルギーに大きな寄与を もたらすが, COの π π^* は N₂のそれよ リ小さい。σ σ*寄与も大きいが, N₂と CO との違いは少ない。また,孤立電子 対(LP)と非結合性軌道(BD*)との相関は 比較的大きい。一方,内殻(CR)が相関エ ネルギーの与える影響は小さく,σ π*, π σ*,異なるπ π*といった励起も寄 与は小さい。

次に,分割手法(ii)で得られた結果を Table 2 に示す。行・列は衝突する電子対 に対応する。同じ軌道同士の相関の寄与 Table 1 NBO-EDA (i) for CCSD correlation energy of N₂ and CO molecules (in kcal/mol)

	\mathbb{N}_2 and \mathbb{C}		uics (iii k							
]	BD* (σ*)	BD* (π*)	BD* (π*)	$RD^{*}(X)$	$RD^{*}(Y)$				
N_2	(Total correlation energy: -204.57; X=N, Y=N)									
	CR (X 1s)	-0.31	0.02	0.02	-1.05	-0.17				
	CR (Y 1s)	-0.31	0.02	0.02	-0.17	-1.05				
	LP (X 2s,2pz)	-2.02	-4.71	-4.71	-18.91	-0.72				
	LP (Y 2s,2p _z)	-2.02	-4.71	-4.71	-0.72	-18.91				
	BD (2s,2p _z ; σ)	-17.95	-0.62	-0.62	-6.01	-6.01				
	BD $(2p_x; \pi)$	-0.83	-32.72	0.01	-10.20	-10.20				
	BD ($2p_y; \pi$)	-0.83	0.01	-32.72	-10.20	-10.20				
	rest	-0.18	0.06	0.06	0.02	0.02				
со	(Total correlation energy: -192.23; X=C, Y=O)									
	CR (X 1s)	-0.28	0.03	0.03	-0.87	-0.11				
	CR (Y 1s)	-0.29	0.01	0.01	-0.19	-1.24				
	LP (X 2s,2p _z)	-1.85	-6.47	-6.47	-14.75	-0.72				
	LP (Y 2s,2p _z)	-1.63	-2.77	-2.77	-1.42	-22.03				
	BD (2s,2p _z ; σ)	-17.48	-0.36	-0.36	-3.60	-9.51				
	BD $(2p_x; \pi)$	-0.80	-23.71	0.09	-4.61	-19.32				
	BD ($2p_y; \pi$)	-0.80	0.09	-23.71	-4.61	-19.32				
	rest	-0.11	0.02	0.02	-0.07	0.28				

†CR, LP, BD and RD represent core, lone pair, and bonding and Rydberg orbitals, respectively.

が大きいが , σ 軌道同士の相関は LP や π 軌道に比べ小さい。 σ ... π の相関も大きく , σ 軌道同士の相 関と同程度である。

Table 2	NBO-EDA (ii) for CCSD correlation energy of
	N_2 and CO molecules (in kcal/mol).

LPπの相関も比較的大		N_2 and CO molecules (in kcal/mol).							
きい。分割手法(i)の場合			CR (X)	CR (Y)	LP(X)	LP(Y)	BD (o)	BD (π)	BD (π)
	N_2	(Total correlation energy: -204.57 ; X=N, Y=N)							
この惊 UK は電丁相関に		CR (X 1s)	-0.85	0.00	-0.15	-0.02	-0.14	-0.16	-0.16
与える寄与が小さい。N2		CR (Y 1s)	0.00	-0.85	-0.02	-0.15	-0.14	-0.16	-0.16
と CO を比較すると		$LP(X 2s, 2p_z)$	-0.15	-0.02	-16.18	-0.57	-2.32	-6.05	-6.05
		LP (Y $2s, 2p_z$)	-0.02	-0.15	-0.57	-16.18	-2.32	-6.05	-6.05
ππの寄与に違いが見		BD (2s,2p _z ; σ)	-0.14	-0.14	-2.32	-2.32	-9.32	-8.47	-8.47
られ、COの方が小さい。		BD (2p _x ; π)	-0.16	-0.16	-6.05	-6.05	-8.47	-18.28	-14.73
		BD ($2p_y; \pi$)	-0.16	-0.16	-6.05	-6.05	-8.47	-14.73	-18.28
また, CO では LPσ,		rest	0.00	0.00	0.04	0.04	-0.05	-0.03	-0.03
LPπの相関で酸素の寄				102.02	VOV				
ヒがナキくかっている		(1 otal correlation)	on energy:	-192.23;	X=C, Y=0	J)	0.12	0.11	0.11
		CR(X Is)	-0.75	0.00	-0.09	-0.03	-0.13	-0.11	-0.11
これはσやπ軌道が酸素		CK(1 IS) LD(V 2r 2r)	0.00	-0.97	-0.01	-0.17	-0.14	-0.19	-0.19
側に号在していること		LP $(X 2s, 2p_z)$	-0.09	-0.01	-20.34	-0.55	-1.88	-3.68	-3.68
関に向任しているとと		LP (Y $2s, 2p_z$)	-0.03	-0.17	-0.55	-12.98	-2.67	-7.51	-7.51
に対応している。		BD (2s,2 p_z ; σ)	-0.13	-0.14	-1.88	-2.67	-9.72	-8.37	-8.37
このトンに本手注た		BD $(2p_x; \pi)$	-0.11	-0.19	-3.68	-7.51	-8.37	-15.41	-13.07
このように平于法を		BD ($2p_y; \pi$)	-0.11	-0.19	-3.68	-7.51	-8.37	-13.07	-15.41
用いると電子相関に対	_	rest	0.00	0.00	-0.02	0.11	-0.02	0.04	0.04

用いると電子相関に する化学的な解釈が可

†CR, LP, and BD represent core, lone pair, and bonding orbitals, respectively.

能になる。現在本手法を励起エネルギーの解析に適用することも行っており,当日そちらについ ても発表する。

[1] A. E. Reed, L. A. Curtiss, and F. Weinhold, Chem. Rev. 88, 899 (1988). [2] H. Nakai, Chem. Phys. Lett. 363, 73 (2002).

[3] T. Baba, M. Takeuchi, and H. Nakai, Chem. Phys. Lett. 424, 193 (2006).